

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12590

研究課題名(和文)リビングヘリテージとその活用の多様性に関する比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study on Variability of Uses of Living Heritage: Case Study of Two Sites - Cebu, the Philippines and Champasak, Lao PDR

研究代表者

西村 正雄 (Nishimura, Masao)

早稲田大学・文学大学院・名誉教授

研究者番号：30298103

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東南アジアにおける遺産の保全・修復・継承に伴う問題を考える中で、地元の人々が日々生活の実践の中で歴史的に培ってきた能力・技術が、遺産の保全にどのように生かされ、また環境の変化において適応するため、どのように創意工夫を凝らして生かそうとしているのか、主にフィールド調査を通して検証してゆく目的で行ってきた。フィールド調査は、ラオス・チャンパサック県の世界遺産地域、フィリピン・セブ島のセブ市を選定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は次の2点である。遺産を持つ地元の人々が、遺産に対してどのように思い、感じているのかについての研究である。本研究で明らかにしたことは、地元の人々は外から持ち込まれる遺産研究、保護のプロジェクトにただ黙々と従っているのではなく、自身の体験、また過去の世代から受けついできた知恵(ローカルノレッジ)を基礎にして、確固とした考えや思いを持ち、それを日々の活動の中で表象してきたこと示した。そうした表象の仕方に多様性が見られること、そして多様性は変動する現状への適応手段として柔軟に生み出されるものである点を、フィリピンとラオスの比較研究を通して明らかにした点である。

研究成果の概要(英文)：The research intended to examine the variability of uses of living heritage which local villagers consciously/ unconsciously practice in their daily life. It focuses on local knowledge and skills which were obtained through their experience through life or as a form of "inherited memory from the preceding generations. The project, therefore, intended to examine a variability in the application of local knowledge in terms of preserving and conserving heritage around them.

In order to examine the above supposition, the research aimed to investigate local peoples' adaptive patterns to natural and social environments around sites. I intended to pursue a series of anthropological fieldwork in two regions of Southeast Asia: Cebu, the Philippines, and Champasak, the Lao PDR. Due to the pandemic of Covid-19, however, I could not conduct the field research, and so the result of the project still left open.

研究分野：遺産学、観光人類学、人類学的考古学、東南アジア地域研究

キーワード：リビングヘリテージ カルチュラル・ランドスケープ 文化遺産 世界遺産 ラオス・チャンパサック県 フィリピン・セブ島 遺産の保護 ローカルノレッジ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者が東南アジア地域で行ってきた「リビングヘリテージの比較研究」の第3段階として行ったものである。リビングヘリテージの問題は、欧米や日本の研究者(例、Anheier, et al. eds., 2011; Winter et al. eds., 2009; 三浦 (Miura) 2004, 2010, 2011) が早く 1990 年代から注目してきた。それらは、主に政策上の問題として述べているものが多かった。また、ユネスコは、住民の生活への関心へと注目を向ける目的から、単なる過去の遺物ではなく「現在の世界に生きている遺産」という意味で「リビングヘリテージ」の用語を用いてきた(例、西村(Nishimura) 2004, 2006)。しかし、この概念そのものが、異なる立場の利害関係者間でさまざまに解釈され、混乱をきたしてきたのも事実である。東南アジアの世界遺産に関する諸研究では、研究者が、遺産地域内で日常生活を営む住民と規制をかける政府との相克について論じ、それを自らの知恵で克服しようとする点を述べてきた(例、小田島 (Odajima) 2018a, b, c; 三浦 (Miura) 2004, 2011)。

2. 研究の目的

先の研究調査の中で明らかとなった三つの問題点を検証することを目的とした。1) 遺産と共に暮らす一般の人々のヘリテージの概念は、公共、私的ヘリテージについて明確な区別はない; 2) 国際機関、政府機関は公共のヘリテージのカテゴリーを重要視し、その枠を公式的に最大限拡大することに努力している。3) 世界遺産などの公式の遺産のカテゴリーと、人々の持ってきた遺産の概念: リビングヘリテージのカテゴリーに確執が見られる。土地の人々が世代を超えて持ち続けてきた遺産概念の最も豊かな多様性は、彼らの遺産の活用の中に見られる。具体的には、本研究では特に、遺産の保全から活用(応用)について、「ローカルな知恵(ローカルノレッジ)」の多様な活用、特に土着の知恵を使った適応戦略を解明することを目的とした。人々が本当に残したいと考える遺産を保存して次の世代に残してゆくための方法、活用の仕方に見られる多様性を明らかにして、遺産のより良い保存に役立てることを最終目的にすえた。

3. 研究の方法

本研究テーマに関しては、先行する研究がほとんどないため、現地におけるフィールド調査によりデータを収集して解析する必要があった。このため、全期間を通してフィリピン、ラオスにおけるフィールド調査をめざした。フィールド調査は、量的調査と、質的調査を組み合わせたものを目指す。しかし、新型コロナウイルス蔓延により、プロジェクト期間中全くフィールド調査ができなくなり、代わりに、現地研究協力者との討議と情報提供を基に、それを文献調査で間接的に検証する形に変更した。

4. 研究成果

< フィリピンにおける研究調査 > フィリピンにおける研究調査は、新型コロナウイルス蔓延の影響で、研究代表者自身によるフィールド調査が全くできなかった。このため、現地の研究協力者のヘラ博士(Dr. Jocelyn Gerra)の研究にネットによる討議という間接的な参加でしか行うことができなかった。ヘラ博士の調査は、セブ島セブ市を中心として、郊外のマンダウエ(Mandaue)市、及びナガ(Naga)市で行われた。これらの都市は、もともと独立して発達してきた都市であり、それぞれ独自の特徴を有してきた。マンダウエ市は、セブ湾岸にあり、埋め立て地が多く、そこに建てられた工場が多いところである。セブ湾沿岸の工業都市として発展してきたことから、他の地域、他の島々(例、北部ミンダナオなど)からの移住者が多く、必然的に、フィリピン・カソリック・キリスト教の総本山的な位置を占めるセブ市と異なり、数多くのモスリムの人々が独自のコミュニティを作って暮らしてきた。また現在そうしたコミュニティは人口の点で、ま

た居住面積の点で拡大している（マンダウェ・コミュニティ住民へのインタビュー（西村 2016、2017））。

2021年、マンダウェで、開発中、大きな建造物の遺構が見つかり、セブ市歴史協会（Cebu Historical Society）を中心に、その遺構跡を発掘調査する計画があり、セブ市側では、その遺構はモスリムの侵入を防ぐ目的の要塞であったという解釈が有望だという。一方もう一つの解釈で、それらは、マゼラン隊の侵入を、マクタン島で防いだと言い伝えられている首長ラブラブ関連の遺構との説もあるとのことである。これはマンダウェに暮らすモスリムにとって、モスリムの侵入を防ぐ要塞では、不都合であり、その点で別の解釈を提示している可能性があるという。ここで注目すべきは、私が述べてきた、フィリピン遺産保全に見られる独特の傾向「競争的遺産(competitive heritage)」が関係してきていることである（西村(Nishimura)2017）。現地の記憶にとどまる伝説的英雄、ラブラブは、キリスト教徒でもなく、イスラム教徒でもない。しかし、現在、このラブラブの記憶を自分たちの都合の良い方向に改変してゆこうとする傾向がみられ、その枠組みでランドスケープについて地元の人々が語る可能性を示している。同様のことが、セブ市の隣りのナガ市でも起こりつつあるようである。ヘラ博士からの報告では、ナガ市では、市立の公的ミュージアム建設の計画が進行している。ここでも、本研究の目標である、活用の多様性が見られる。ナガ市政府は、造るミュージアムについて、2つの方針を持っている。一つは、ナガ市こそ歴史的に長く存在してきた都市としてのアイデンティティを示すことが可能なミュージアムにすること。この意味で、セブとは異なった歴史的アイデンティティを強調しようとしている点である。その観点から、展示物について、セブとの違いを強調したいとの意向がある。第二として、展示の方法についても、セブにない種類のミュージアムということから、デジタルミュージアムの構築の可能性について模索している。セブの調査で研究代表者が明らかにしてきた、「競争的ヘリテージ(competitive heritage)」の文化的傾向が、こうした公共の施設の設計に及んでいるという点であり、フィリピンの遺産活用の多様性の基に、「競争的」という要素が見られることである。フィリピンでは、遺産を競争のための手段としている様子が見られ、他よりも「歴史的正当性」「歴史的真正性」さらに「歴史的包括性（説明力）」の優秀であることを示す手段として使われているように思われる。

<ラオスにおける研究調査> ラオスにおける研究調査も、フィリピンの場合と同じく、プロジェクトの3年間、ほぼ全期間を通して自ら現地へ赴いて行うフィールド調査がほとんどできなかった。しかし、ラオスについては、2022年度末にラオス政府による外国人入国解除があり、2022年12月と2023年3月に簡単な調査を行い、また2023年3月に、本研究プロジェクトと関連する国際シンポジウムを開催した。

2022年度実施した短期のフィールド調査は、特に観光開発に問題をしばり、現地の人々自身による遺産を使った観光客向けの表象の仕方の調査であった。実際には、海外から観光で訪れる人々の期待感と、地元の人々の期待感の間の相違を明らかにし、地元の人々が、それらに妥協して自らの考えを変更させているのかどうかという点で、チャンパサック県のチャンパサック郡、およびメコン川対岸のパトンボン郡でインタビュー調査を行った。結果的に、外国からチャンパサックに来て、にわかに観光業に参入したものと、代々観光業を現地で行ってきたものの顕著な差が見られた。今回のコロナ禍で観光客の減少に対処しきれなくなり、多くホテル業、レストラン業を営むもののうち、にわかに外国から来たもの、あるいは外国と繋がっているものの多くが事業を撤退していた。一方、数世代にわたって長く事業を行ってきたものは、過去から受け継いだ知恵によって、そうした負の現象への適応の仕方を熟知しており、創意工夫を重ねてほぼ全員、観光関連の仕事を継続してた。すなわち、彼らの持つ過去の経験からくる知識が、こうした事態に良く対応していることが確認された。

<国際シンポジウムの開催> 最後に、2023年3月11日と12日にチャンパサックで、国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムの目的は、近年の開発、特に遺産を絡めた観光開発で、大々的に国際観光客を迎えるため、新しい建物を建てるとか、道路を整備する、土地の景観を大規模に変更する開発計画が立て

られてきており、この点でいままで遺産の保護を担ってきた、地元の人々の土地の景観に対する考え方（カルチュラル・ランドスケープ(cultural landscape)）と、彼らがどのようにそれを守ろうとしているのかを、他国の事例を含めて明らかにしておくことであった。

シンポジウムでは、1)カルチュラル・ランドスケープの概念規定と、ラオス及び周辺のタイ、カンボジアでの事例研究；2)ランドスケープ保護と遺産保護の関係、について討議した。会議で際立ったのは、地元の人々のランドスケープ概念と、いわゆる建築学、考古学、地理学などの専門家が述べるランドスケープは異なっているという点であった。カンボジアからの発表者は、そうした齟齬が、今カンボジアのアンコール遺産の活用の部分で大きくなってきているとのことであった。会議の最後に参加者がほぼ全員一致して賛同したシンポジウムの結論として、遺産保護と多様な活用を誤りなく進めるためには、現地に残る無形遺産研究を集中的に進め、その部分における地元の人々の多様なかわり方をまず先行して明らかにしておくことの重要性であった。

<まとめ>

本プロジェクトは、研究方法として、現地におけるフィールドワークを中心に据えていたことから、3年以上に及ぶ新型コロナウイルス蔓延の甚大な影響を受けて、初めに設定した検証課題の達成が難しかった。しかし、間接的な検証作業の結果として、次の2点での成果を強調しておく：第一に、ローカルノレッジは、知識の構造（ロジックの構造）の点で大きく異なる。ローカルノレッジは、体験的で、西洋ロジックのカテゴリーとは全く異なるカテゴリーを持って、環境や社会現象を分類している。そうした分類の体系は記憶の形で、日々の生活実践を通して、そうしたカテゴリーは、彼らの日々の生活実践の経験から獲得され、あるいは先人の知恵として、語り継がれ、記憶として残されてゆく知識である（例、インゴールド 2021; 西村 2007）。そして重要なことに、応用の多様性は、自らの経験と記憶の範囲からのみ、生み出されることが判明している；関連して、第二に、ローカルノレッジが自己の細かい経験を中心にして、他の人から記憶を通して得た知識の集合体となっている点である（Nishimura 2016）。集合体は、体系的に、そして包括的にすべての現象に説明を加えるロジックではないが、集合体から引き出される知恵（ローカルノレッジ）に柔軟性があり、そこら周りの環境の変化に対して多様な対応を生み出している。同時にただ無制限に対応しているのではなく、その対応に一定の限界（範囲）を設けている点である。（例、シンポジウムにおけるカンボジア代表（リ・バンナ博士〔Dr. Ly Vanna〕等の発表）などの発表。

引用文献

<和文>

2021 インゴールド、ティム（柴田崇、他訳『生きていること：動く、知る。記述する』。東京：左右社。

2011 三浦恵子『アンコール遺産と共に生きる』。東京：めこん。

2006 西村正雄「遺産概念の再検討」、『文化人類学研究』第7巻。Pp.1-22。

2007 西村正雄(ラオス地域人類学研究所) (編著)『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』。東京：雄山閣。

2007 小田島理絵「生活へのまなざし - チャムパーサクにおけるフィールドワークの現場から - 」。ラオス地域人類学研究所（西村正雄）編『ラオス南部：文化的景観と記憶の探求』雄山閣 2007、所収。Pp.111-131。

2018a 小田島理絵「ラオス人民民主共和国における博物館：制度化の過程」、『博物館学雑誌』（全日本博物館学会）第68号。Pp.65-92。

<欧文>

2011 Anheier, H. and Y.R. Isar eds., Heritage, Memory & Identity. London: Sage.

2002 Climo, J.J. and M.G. Cattell eds., Social Memory and History. Walnut Creek, CA: Altamira

Press.

2004 Miura, Keiko (三浦恵子). Contested Heritage: People of Angkor. Ph.D. Thesis. London: University of London, School of Oriental and African Studies.

2010 Miura, Keiko (三浦恵子). "World Heritage Sites in Southeast Asia: Angkor and Beyond." In Hitchcock, Michael, Victor T. King, and Michael Parnwell eds., Heritage Tourism in Southeast Asia. Copenhagen, S., Denmark: NIAS Press. Pp.103-129.

2004 Nishimura, Masao (西村正雄). Representing "Vat Phou" - An Ethnographic Account of the Nomination Process of Vat Phou and Adjunct Archaeological Sites on the World Heritage List -. Bulletin of Waseda University, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, vol.49.No.3. Pp.29-63.

2014 Nishimura, Masao (西村正雄). "Transformation of Cultural Landscape of Complex Societies in Southeast Asia: A Case Study of Cebu Central Settlement, Philippines." In Masao Nishimura ed. Human Relations and Social Developments. Quezon City, Philippines: New Day Publishers, Pp. 275-308.

2016 Nishimura, Masao(西村正雄). Practicing Heritage - Living Heritage in Champasak, Lao PDR. The 5th International Conference of Lao Studies. Held at Thammasat University. Bangkok, Thailand. June. 配布資料。

2017 Nishimura, Masao (西村正雄). An Attempt to Conserve the Philippine Heritage: Preliminary Analysis of the Data of Heritage Studies in Cebu City in 2016. The First International Conference on Philippine Studies. 配布資料。

2019 Nishimura, Masao. ASEAN Tourism Policy and Tourism Development in the Southern Part of Lao PDR. Bulletin of Waseda University, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, vol.65. Pp.537-555.

2023a Nishimura, Masao (西村正雄). "Opening Statement. International Symposium on Cultural Landscape Approach." International Symposium on Cultural Landscape Approach. Held at Champasak, Lao PDR. March 11- 12, 2023. 配布資料。

2023b Nishimura, Masao (西村正雄). "Cultural Landscape Approach: Archaeological Anthropological Perspectives- Champasak Case - ." International Symposium on Cultural Landscape Approach. Held at Champasak, Lao PDR. March 11- 12, 2023. 配布資料。

2018b Odajima, Rie (小田島理絵) "On Intangible and Tangible Heritage: Human Beings, Objects, Agency, and the Integration of Cultural Perception." Bulletin of Waseda University, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, vol.64. Pp.739-757.

2018c Odajima, Rie (小田島理絵) "The Space for Future: Development and Tradition in Laos." 『文化人類学年報』(早稲田大学大学院文学研究科文化人類学コース) 第13巻. Pp.1-8.

2023 Odajima, Rie (小田島理絵). "An Anthropological Study of Intangible Cultures in Lao PDR." International Symposium on Cultural Landscape Approach. Held at Champasak, Lao PDR. March 11-12, 2023. 配布資料。

2003 Stewart, P.J.and A.Strathern eds., Landscape, Memory and History. London: Pluto Press.

2009 Winter, Tim "Destination Asia: Rethinking Material Culture." In Winter, Tim, Peggy Teo and T.C. Chang eds., Asia on Tour. London: Routledge. Pp.52-66.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Masao Nishiimura	4. 巻 65
2. 論文標題 ASEAN Tourism Policy and Tourism Development in the Southern Part of the Lao PDR	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 537, 555
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masao Nishimura	4. 巻 64
2. 論文標題 Heritage in Cebu City, the Philippines: A Study of "Competitive" Heritage - A Preliminary Field Report.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 759, 779
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Sikhaxay, Phakhanxay (editor, and partial author)	4. 巻 1
2. 論文標題 Management Plan for the Conservation of Plain of Jars, Xienkhong Province, Lao PDR (Master Plan for UNESCO World Heritage)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Master Plan for UNESCO World Heritage	6. 最初と最後の頁 1, 168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 4件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Masao Nishimura
2. 発表標題 For Building a New Museum of Naga City: Long Distance Trade and the Development of Complex Societies in the Philippines
3. 学会等名 Naga Historical Society, the Philippines (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Masao Nishimura
2. 発表標題 Long Distance Trade and Development of Complex Society of the Philippines: Cebu Central Settlement Case - An Anthropological -Archaeological Study of Cebu in the Prehispanic Period
3. 学会等名 Joint Conference of Philippine Historical Society and Cultural and Historical Affairs Office - City of Cebu (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Masao Nishimura
2. 発表標題 ASEAN and Tourism Development in the Lao PDR.
3. 学会等名 The 6th International Conference on Lao Studies, held at Cornell University (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masao Nishimura
2. 発表標題 International Symposium on Cultural Landscape Approach: What is Cultural Landscape - Basic Concept
3. 学会等名 International Symposium on Cultural Landscape Approach (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masao Nishimura
2. 発表標題 Cultural Landscape Approach: Archaeological Anthropological Perspectives - Champasak Case-
3. 学会等名 International Symposium on Cultural Landscape Approach (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 世界遺産検定事務局（監修補助を行った）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 マイナビ出版	5. 総ページ数 138
3. 書名 はじめて学ぶ世界遺産50 - 世界遺産検定4級公式テキスト3版	

1. 著者名 世界遺産検定事務局（監修補助を行った）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 マイナビ出版	5. 総ページ数 179
3. 書名 きほんを学ぶ世界遺産100 - 世界遺産検定3級公式テキスト3版	

1. 著者名 世界遺産検定事務局（監修補助を行った）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 マイナビ出版	5. 総ページ数 275
3. 書名 くわしく学ぶ世界遺産300 - 世界遺産検定2級公式テキスト4版	

1. 著者名 西村 正雄（分担執筆：pp.43-54）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 269
3. 書名 海老澤表編著 世界遺産パリの文化戦略	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2023年3月11日、12日に国際シンポジウムをラオスのチャンパサック県チャンパサック郡で開催した。その際、ラオス政府の情報文化観光省のほか、チャンパサック県政府の情報文化観光省、およびチャンパサック世界遺産保存事務所（通称ワット・プー・ミュージアム）の全面的な協力を得た。さらに、間接的にユネスコ・バンコックオフィスの協力を得た。
 また資金的には、科研費のほか、りそな財団国際学術交流資金の援助を受けたことを合わせて報告する。また、フィリピンにおける研究では、セブ市のサンカルロス大学の協力を引き続き得ていることを付記しておく。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	G e r r a (Jocelyn)		
研究協力者	P h a k h a n x a y (Sikhanxay)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 International Symposium on Cultural Landscape Approach	開催年 2023年～2023年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------